幼年教育研究年報　第20巻
*The Annual of Research on Early Childhood*, 1998, **20**, 51 − 56

# 自由遊び場面における3歳児の独語の特徴

湯沢　美紀[1]

# Private Speech by 3-year-old Children in the Situation of Their Play

Miki Yuzawa[1]

This study was designed to analyze the characteristics of the private speech of preschool children aged 3 years in the situation of play. The investigator observed children's activities and recorded their conversation without interfering in the activities. The data recorded from 17 children consisted of 567 phrases of private speech and 366 phrases of social speech, respectively. Self-regulatory private speech was mainly observed when children were engaged in creative activity. The frequency of self- regulatory speech was correlated with that of private speech describing children's own activity. Furthermore, the novel private speech on the spontaneous restatement was notice in children's play. These findings may provide the specific characteristics for the significance of the private speech in 3-year-old children.

**Key words:** preschool age children, private speech, self- regulation

## 目　的

子どもは，他者とのコミュニケーションを目的とした社会的言語(social speech)だけではなく，他者に向けられたものではない言語行為，つまり独語(private speech)を日常生活で多く用いる。独語は，子どもの発達を探るための重要な現象とみなされ，20世紀初頭からピアジェ，ヴィゴツキーらにより広く取り扱われてきている。

ピアジェは自由遊び場面での子どもの発話を観察し，そのような言語を自己中心的言語(ego-centric speech)として扱った。その発話は，子どもの自閉性，自己中心性に由来し，子どもの社会化により消失するとしている（ピアジェ,1954)。

一方，ヴィゴツキーは課題遂行困難場面での子どもの発話を観察し，そこで発せられた言語の自己調整(self-regulation)機能について着目した。幼児が用いた自己調整機能を有する独語は，そもそも母親が日常用いているような子どもの行動調整を促す言語機能から引き継がれたものであるとみなした。子どもはそのような言語をまず成人に向けて用いることができるようになり，後に課題状況を一人で乗り切ろうとする場合にその言語行為を借りて状況を分析し，行動の計画・実行を行うようになるというものである。その言語はだんだんと短縮され，つぶやきを経て消失するとしている（ヴィゴツキー，1966)。つまり，ピアジェが独語を社会性の欠如のあらわれとしたものをヴィゴツキーは社会的言語が内化していく過程に生じるものとしてとらえている点で大きく異なるとされていた。

しかし，ピアジェが用いた自己の観点と他者の観点とが未分化で自我の明瞭意識を欠いているという意味の「自己中心性」という考え方は子どもが社会と切り離されて捉えられていたのではなく，むしろ社会と子どもが関わりあっているという事実を述べていたと考えられる。ピアジェは後に「自閉性」という言葉の使用を，子どもは外界から孤立した存在であるといったような誤解を生じやすいという理由でやめている(滝沢，1975)。そのため，子どもの独語についてのピアジェの主張について現在，ヴィゴツキー

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

との明らかな相違点は見いだす事はできない。

Smolucha, (1992)は，ヴィゴツキーの理論を母子間の相互作用とそこでの発話を注意深く観察することで，事例的に検証した。そこでの結果は，母親が子どもを調整する際に用いる言語の他者調整(other-regulation)機能が，子どもが自分自身の行動を調整するために用いる言語の自己調整機能へと転移し，後に子どもが一人で行動を起こす際に重要な役割を果たすということを示唆していた。

幼児の独語に関する研究の多くはこの自己調整機能に焦点をあて(Azmitia,1992; Beaudichon,1973; Frauenglass & Diaz, 1985; Furrow,1992, 1984; Duncan & Pratt,1997)，設定条件下で行われる母親と実験者との相互交渉の中から導き出された言語を抽出したものや（Furrow,1992; Furrow, 1984)，課題解決状況など，特定の場面の条件下で発せられた幼児の発話を取り扱ったものであった(Azmitia, 1992; Beaudichon,1973; Frauenglass & Diaz, 1985)。このように従来の研究は，特定の状況下での自己調整機能を有する独語を抽出し検討したものであり，そこでの独語が幼児の生き生きとした日常生活を反映したものであったとは言い難い。幼児は母親や実験者といった特定の成人だけではなく，むしろ同年齢の子ども社会の中で様々な言葉を発し，また，様々な状況で多くの独語を発しているのである。そこで本研究では，自由遊び場面を観察することにより，独語の発せられる文脈やその時の子どもの遊び状況などを考慮に入れながら，幼児の独語について検討していきたい。本研究の目的は以下の三点である。第一に，自己調整機能を有する独語がどのような遊び状況下で多く発せられるのかを明らかにしていく。第二に，自己調整機能を有する独語はその他の言語の機能を有する独語と関係があるのか，また自己調整機能を有する独語と社会的言語は関係があるのかという点について検討する。第三に，幼児が独語を発した際の周囲の状況や，幼児の遊び状況を考慮に入れながら，幼児の独語の特徴を明らかにする。

また，幼児を対象とした言語形態を調べた研究では，三歳児に独語が最も多く，四歳児から五歳児にかけてその割合も減少するという事が示されている(深田・小坂，1996)。そこで，本研究では家庭生活から同年齢の子ども達との社会生活を開始する三歳児にまず焦点をあて観察を行う。

## 方　法

**1．対象**：東広島市のＦ幼稚園の年少児（三歳児）クラスの幼児であった。観察対象児は17名。平均月年齢は44ヶ月（範囲39-48ヶ月)。

**2．観察期間**：観察期間は1996年５月から９月までの５ヶ月であった。観察時間は，園児が登園してから後の自由遊び時間の１時間であった。

**3．観察方法**：著者は，観察中，子どもの遊びや会話には参加せず「観察者」としての立場をとり，１名で観察を行った。著者は，子どもの背後に位置し，子どもの発話ならびに発話状況をフィールドノートに書き取った。発話状況は子どもの遊び場面ならびにエピソード，そして幼稚園内の場所について詳細に記録した。また，子どもの遊びの構成員が一人か，それ以上かという点，ならびに，経過時間も記録した。また，独語と社会的言語については，他者への視線の有無を基準とし，他者に視線が向けられていないものを独語，他者に視線が向けられたものを社会的言語として，フィールドノートに書く段階で決定を行った。社会的言語が誰に向けられたものかという点についても同時に記録した（母親，保育者，友達名)。記録はフィールドノート（付表参照）と伴わせて小型録音機を用いておこなった。

**4．分析カテゴリー**：言語の機能の分類についてはFurrow(1984)の１２のカテゴリーに加え，それらのカテゴリーに分類できない２つのカテゴリーを加え１４のカテゴリーで分類を行った(Table 1)。独語についてのカテゴリーについては独語のレベルを５段階に分けたものがある(Diaz,1992)が，そのカテゴリーは外言(発声を伴う言語)が，内言化（発声を伴わない言語）されていく過程をカテゴリーに分析したものであり，独語の説明概念としてそのカテゴリーを取り扱っていた。そのため具体的な発話についての厳密な分類が困難だと考えられた。また，Furrow(1984)は言語の機能を細かく分類したものであり，具体的な発話のカテゴリー化が容易である点で有効であるように思われるので，本研究ではこれを採用し分類を行った。また，発話状況は観察を通して６つの場面に分類した(Table 2)。

**5．分析方法**：発話は小型録音機の音声記録を文字化した。その中で無作為に100語を抽出し，言語の機能の分類については著者と他の大学院生１名と分類を行ったところ，一致率は93％であり，高い一致率が得られたので，後の分類は著者一人で行った。繰り返された発話については第１発話のみをカウントした。発話は，独語が567語，社会的言語が366語が観察された。

Table 1　本研究で用いた独語および社会的言語の14の言語機能の分析カテゴリー

| 言語の機能の分析カテゴリー | 機能の内容と具体例 |
|---|---|
| 1　道具的使用 | 子どもの要求　（例）「ぼく，それがしたい」 |
| 2　他者調整 | 他者に次の行動を起こすようにし向ける　（例）「そこに行ってよ」 |
| 3　自己調整 | 自己に次の行動を起こすようにし向ける　その言葉を発した後その行動を実際，子どもが実行する　（例）「この積み木をそこに置こう」 |
| 4　注意喚起 | 他者に知覚的行動を起こすようにし向ける　（例）「見て！」 |
| 5　あいさつ | 日常的な挨拶　（例）「おはよう」 |
| 6　感情表現 | 感情や内的心的状態を示す　（例）「先生，大好き」 |
| 7　参照 | 自分と関連がない現在の状況や事象について述べる　（例）「あそこでお友達が喧嘩している」 |
| 8　疑問 | 疑問　（例）「あれは，なに？」 |
| 9　自己の活動について述べる | 自分の行っている行動を述べている　（例）「お花を描いてる」 |
| 10　想像 | 歌や言葉言葉遊びあるいは見立て　（例）「これ，帽子」（頭の上に石を乗せた状態） |
| 11　情報 | 現在の状況や事象について述べたものではないが，自分や家族にまつわる情報を語る　（例）「昨日，遊園地に遊びに行ったんだよ」 |
| 12　その他 | 聞き取れなかったり，理解できなかった言葉 |
| 13　追随 | 自分と遊びを共有していない子どもの言葉を追随する |
| 14　かけ声 | かけ声　（例）「よいしょ」 |

Table 2　本研究で用いた発話状況分析カテゴリー

| 分析カテゴリー | 具体的な活動 |
|---|---|
| (1)　傍観 | 自分は何もしておらず他者の活動などを傍観している |
| (2)　想像遊び | セーラームーンごっこ・オーレンジャーごっこなど |
| (3)　機能的遊び | 砂をまく・水を単に流す・滑り台に乗る・ブランコに乗るなど |
| (4)　創作遊び | ブロック遊び・お絵かき・砂場遊びなど |
| (5)　探索行動 | 裏山や草むらでの虫取り・花摘みや・遊びに必要な素材探しなど |
| (6)　日常の作業 | シール貼り・鞄をしまう・おしっこに行くなど |

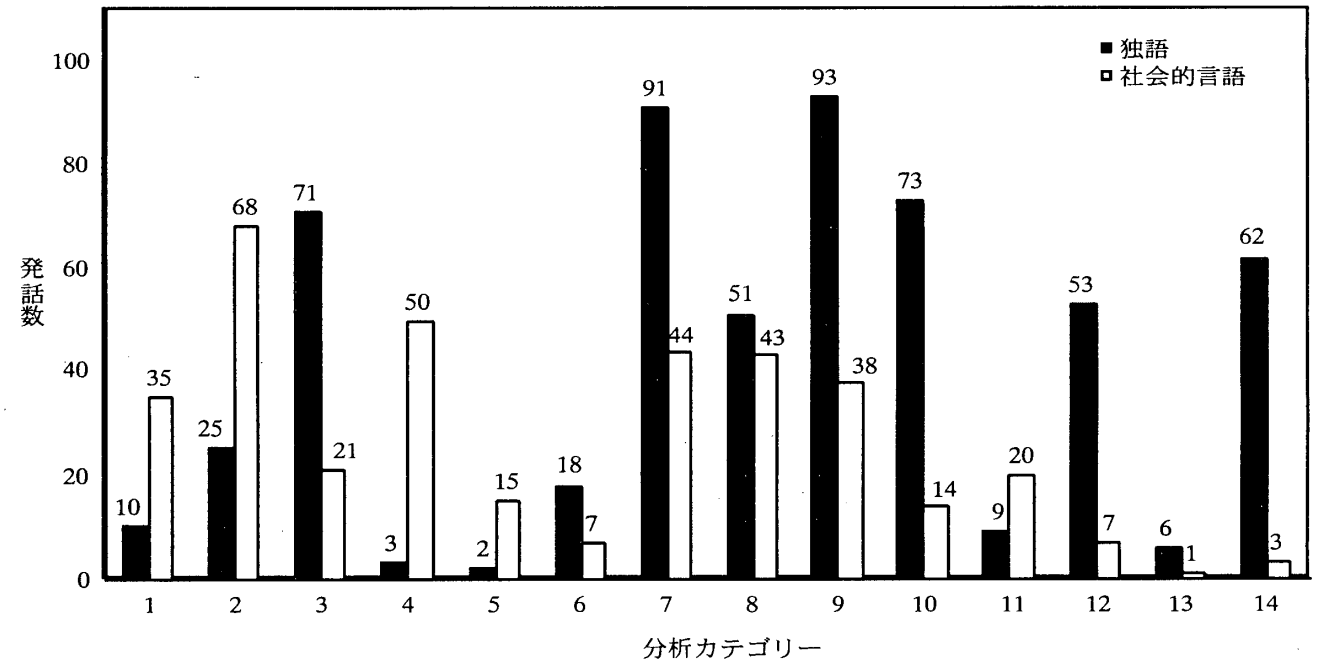


Figure 1　言語の各機能ごとの独話ならびに社会的言語の発話数

## 結果と考察

### （1）自己調整機能を持つ独語の状況語との発話率

ここでの発話率は，自己調整機能を持つ独語の総発話数をそれぞれの6つの状況に子どもが従事していた時間の合計（分）でわったものである。Table 3からわかるように，自己調整機能を持つ独語は様々な状況でみられる。特に，多く見られたのは創作遊び場面であった。この場面では，子どもは積み木を自分の目標に向けて形作ったり，粘土で多くの創作物を作り出していた。そこでの活動は，入園したばかりの年少児という事で一人か，あるいは並列的に行われていた。

このような創作遊び場面は，自分自身で未知のものを作り出すという点で，自分の次の行動を方向付け，それを行うと活動であると思われる。そのため自己調整機能を有する独語が多く利用されていたと考えられる。また，その他，イメージ遊びなどの想像遊び場面や，日常の作業場面，探索場面においてもこの独語は用いられた。自己調整機能を有する独語は，想像遊び場面においては，遊びの中での自分の行動を調整し，より楽しい遊びになるように，自分なりのアイデアを生み出しそれを実行する際に用いられていた。また，日常の作業場面においては，登園時のシール貼り，上靴をしまう，水着に着替えるといったような日常的なルーティンを行う際に用いられていた。また探索場面では，虫のいる場所にむけて歩き出す場合，あるいは危ない場所を避ける際に用いられていた。この事は単に，自己調整機能を持つ独語は目前の課題を遂行する際だけではなく，幼児の行動全般にわたって広く用いられてい事を示すものである。しかし，傍観場面（70分の観察時間中）においては，まったく見られなかった。

### （2）自己調整機能を有する独語と他の独語ならびに社会的言語との関連

ここでは，自己調整機能を有する独語を多く用いる子どもの発話パターンを探る。自己調整機能を有する独語の発話数と社会的言語の発話数については何ら相関は見られなかった。しかし，独語内で特徴が見られた。「自己調整」機能を有する独語の発話数と，「参照」機能を有する独語の発話数（$r = -.543$ $t < .05$），「かけ声」機能を有する独語の発話数（$r = -.531$ $t < .05$），「その他」機能を有する独語の発話数に負の相関（$r = -.517$ $t < .05$）が見られ，一方「自己調整」機能を有する独語の発話数と「自己行動についての口述」機能を有する独語の発話数との間に正の相関（$r = .532$ $t < .05$）が見られた。また弱い傾向として「想像」機能に正の相関（$r = .424$ $t < .1$）が見られた。

「参照」機能，「かけ声」機能，「その他」機能は，ここで用いた言語の機能の中でも自己の行動についての関与が低いと考えられる。そのため，自己の関与が高いと思われる「自己調整」機能との間に負の相関が見られたのであろう。一方，「自己行動についての口述」機能は「自己調整」機能よりも成熟したものではないものの，自己の行動を調整する一連の活動を反映していると考えられる。実際，「自己調整」機能が最も多く見られた創作遊び状況での「自己の行動についての口述」機能を有する独語の発話率は他の状況と比べ，.112（28発話／251分中）と最も高く，自己の行動を調整する際に「自己調整」機能を有する独語とともに「自己行動についての口述」機能を有する独語が同時に用いられていたと考えられる。

### （3）独語と対象児の年齢および観察時期との関連

本研究では対象児が少なかった点，ならびに，子どもの観察は1回であったことなど，十分なデータとは言えないが，予備的に観察児の年齢および観察時期と独語との関連をみた。その結果，ヴィゴツキーの理論から「自己調整」機能を有する独語は観察を通して増加すると考えられたが，「自己調整」機能を有する独語と対象児の年齢($r = -.217$)ならびに観察時期($r = .408$)に有意な相関は見られなかった。その要因として，本データの不備に由来するという点が考えられる。しかし，また，別の要因として「自己調整」機能を有する独語の増加はもっと長いスパンで生じるため，本研究の短い観察時期では，関連が見られなかったことも考えられる。実際，Furrow(1992)は，幼児が2歳児の段階を第1セッション，その子ども達が3，4歳の段階を第2セッションとし，子どもと母親および実験者のそれぞれの相互交渉を観察し，第1セッションと第2セッションで発せられた独語の発話数を検討した。その結果，「自己調整」機能を有する独語については発達傾向は見られなかったため，

Table 3　発話状況ごとの自己調整の独語分類（発話率）

| 発話状況カテゴリー | 自己調整機能の独語の発話率（発話数 / 従事時間） |
|---|---|
| (1) 傍観 | .000　(0/70分) |
| (2) 想像遊び | .077　(10/130分) |
| (3) 機能的遊び | .046　(13/281分) |
| (4) 創作遊び | .127　(32/251分) |
| (5) 探索活動 | .064　(7/110分) |
| (6) 日常の作業 | .051　(9/178分) |

それらの発達的な変化はおそらく4歳から6歳といったより年長児において見られるであろうとしている。つまり，発達的な傾向は数ヶ月といったようなものではなく，より長期的な観察を通して見ていく必要が考えられ，今後の研究が必要である。

（4）独語の「追随」機能

今回，子どもの自由遊び場面を通して「追随」という機能を観察することができた。この発話は対象児が自分の遊びを行っている間，自分と遊びを共有していない子どもの発話をそのまま発するというものである。この機能については，7事例が観察された。「追随」という機能は独語で6事例，社会的言語で1事例観察された。

社会的言語で観察された「追随」の言葉は，その言葉を介して幼児が他者の遊びに加わる役割を果たしていた。一方，独語で観察された「追随」の言葉は，子どもの遊びに展開をもたらす場合や（事例1　参照），もしくは，後の自分の遊びに何ら作用しない場合（事例2　参照）も含め，幼児が他者の遊びに加わっていくという役割は果たしていなかった。年長の幼児について観察していないので，断言はできないが，三歳児の場合は積極的に他者に関わっていく手段としてその言葉を用いていたとは考えにくい。自分の遊びに従事しながらも他者の発言を自分の遊びの途中に発していたこの活動は，三歳児の自分と他者，あいは自己の遊びと他者の遊びとの臨界の曖昧さを反映したものではないだろうか。

本研究では，自由遊び場面における幼児の特に「自己調整」機能をもつ独語に注目し，いくつかの側面から検討を行った。また，観察中に見られた特徴的な独語について考察を行った。本研究は観察的研究であったため，子どもの本来の発言を記録することができたものの，活動中の発言が子どもの従事していた状況にかなり依存したものであった。そのため，厳密な議論を行うためにも，事例数を増やしたり，一人の子どもについて数回の観察を重ねる必要があったと思われる。また，本研究では三歳児の独語に焦点を検討を行ったが，三歳児の特徴をさらに明確にするためにも，幼児期全期にわたった横断的観察を重ねて行う事も同時に必要であったと思われる。これらの事は，今後の課題である。

最後に，観察を通して状況に関わらず独語の発話数にかなりな個人差が見られたことを付記する。個人差については，Azmitia（1992），Duncan & Pratt（1997）らが，課題遂行に関して熟達者と初心者から検討を行っているが，幼児の活動全般にわたってみられる独語の発話数に関する個人差については，今まで検討されてこなかった。今後は，個人に焦点をあてた厳密な観察を行うことにより，独語の特徴をさらに明らかにしていくことができるであろう。

**事例　(1)**

M児は砂遊びをしている。砂を使ったお弁当づくりを他の子ども達と並列的に行っている。

---

M児：「ねえーこれ，お弁当になったよ。」　→N児
N児：「えー，お勉強？」　→M児
M児：「ちがうよ，お弁当だよ。」　→N児
（年長児が，そばを通りながら，年長児の遊びの内容について独語をいっていた）
年長児：「クリームつくろ」
（M児は年長児に視線を向けるわけではなく，遊びを続けながら年長児と全く同じ言葉を追随した）
M児：「クリームつくろ」　［追随］
（お弁当づくりから，クリーム作りに切り替わる）
「クリーム入れる」　［自己調整］

**事例　(2)**

T児はバケツの中にかみ切れを入れ，色を水に出すという遊びを一人で行っている。

---

T児：「この中に水を入れるの」　［自己調整］
T児：「この中に，ちょっとだけ水を入れて」
［自己行動の口述］
T児：「スパゲティー作るの」　→R児
（Tくんとかなり離れている距離で，Aくんが「畑のおいもさん」という言葉を発した）
T児：「はたけのおいもさん」　［追随］
（Tくんは他児に視線を向けることなく遊びを続けながらAくんと全く同じ言葉を追随した）
T児：「スパゲティー作ってるの」　→保育者
T児：「また別のスパゲティー作る　［自己調整］
（遊びを継続し行う。この遊びは後6分続けられた）

---

（註）（）内は状況についての説明を記述し，［］は言語の機能の分類。→がついている発話は社会的言語を示す。下線は「追随」機能の発話を示している。

## 引用文献


Azmitia, M.1992 Expertise, private speech, and the development self-regulation. In R. M. Diaz(Ed.), *Private speech: from social Interaction to self-regulation.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 101-122.

Beaudichon, J. 1973 Nature and instrumental function of private speech in problem solving situations. *Merrill-Palmer Quarterly*, **19**, 117-135.

Diaz, R. M. 1992 Methodological concerns in the study of private speech. In Diaz, R,M.(Eds.), *Private speech: from social Interaction to self-regulation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 55-84.

Duncan, R. M., & Pratt, M. W. 1997 Microgenetic change in the quantity and quality of preshcooler 's private speech. *International journal of behavioral development*, **20**, 367-383.

Frauenglass, M. H., & Diaz, R. M. 1985 Self-regulatory functions of children's private speech: A critical analysis of recent challenges to Vygotsy's theory. *Developmental Spychology*, **21**, 357-364.

深田昭三・小坂圭子　1996　自然場面における幼児の会話―トピックの開始方略―　幼年教育研究年報, **18**, 71-75.

Furrow, D. 1992 Developmental trends in the differentiation of Social and private speech. In R. M. Diaz(Ed.), *Private speech: from social Interaction to self-regulation*.. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 143-158.

Furrow, D. 1984 Social and private speech at two years. *Child Development*, **55**, 355-362.

ピアジェ J. 大伴茂（訳）1954　児童の自己中心性　同文書院
(Piaget, J. 1923 *Le langage et la pensee chez l'enfant*. Paris.)

滝沢武久　1975　ワロン・ピアジェの発達理論　明治図書

ヴィゴツキー L.C. 柴田義松（訳）1966 思考と言語　明治図書
（Выготский, Л. С. 1934 Мышление и Речь）

Smolucha, F. 1992 Social origins of private speech in pretend play. In R. M. Diaz(Ed.), *Private speech: from social Interaction to self-regulation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 123-141.

## 謝　辞

本研究は，広島大学教育学研究科における幼児心理学実地研究での観察データを用い，新たに考察したものです。ご指導を賜りました広島大学山崎晃教授，深田昭三講師に厚く御礼申し上げます。また，本研究にあたりご協力を賜りました広島大学附属幼稚園の諸先生方および園児のみなさんに心より感謝申し上げます。

付表　フィールドノートの観察記録

| 時間 | 分 | 場所 | 子どもの発話 | 応答内容 | 応答者 | 構成員 | 場面状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:12 | 0 | 入り口 | 「これバック，どこ？」 | →観察者 | | 一人 | バックをしまう場所を観察者に尋ねる |
| | | | 「Hくん，Hちゃん」 | →H児 | | 二人 | |
| | | | 「ここなのー」 | | | 一人 | 所定の場所にバックを片づける |
| | | | 「Tくん，昨日遊びに来てくれてありがとう」 | 「うん」 | T児 | 二人 | |
| 9:13 | 1 | 滑り台 | 「また遊びに来てね」 | →T児 | | | |
| | | | 「かわいいね」 | 「かわいがっちゃだめこれ，Mちゃんのやけん」 | M児 | 複数 | M児の妹をさわりながらかわいがるが，拒否されたため，滑り台の上に戻る |
| 9:14 | 2 | | 「お名前は？」 | 「Tです」 | T児 | | お互いに笑いながら応答しあう |
| | | | 「Aです」 | 「お名前は？」 | T児 | | 挨拶を交わし別々の場所に移動する |
| | | | 「ばいばい」 | | | | |
| 9:16 | 4 | 着替え用絨毯 | 「A，着替えるもんね」 | 「ばいばい」 | T児 | 一人 | プールで水遊びするために，発話後，水着に着替える |
| 9:18 | 6 | プール | | | | | |
| 9:21 | 9 | プール外 | 「きゃー」 | | | 複数 | |
| | | | 「これ，何？」 | 「ドラゴンボールよ」 | N児 | | プールからでて，N児の母親の持っていたカードについて質問する |
| | | | 「ふーん」 | | 母親 | | |
| 9:22 | 10 | プール | 「いっぱい，なってる」 | | | | 多くのおもちゃがプールに浮かんで浮いている |
| | | | 「えい」 | | | | 水をはねのけ遊んでいる |
| | | | 「わたし水遊びするの」 | | | | 発話後，別のおもちゃを使った水遊びを再開する |
| | | | 「やらせて」 | →R児 | | | R児がホースをA児から取る<br>R児はホースを返してくれず，A児はあきらめて，水遊びを続ける |

（註）応答内容の→は，他者に視線が向いていたことを示し，相手は応答しなかったものの相手に応答を求めたものであった。相手が応答した場合は，相手の発話に観察対象児が応答した場合同様，社会的言語と見なす。
下線部は独語である。